

ふるさとへの絵を胸に



梅雨が明けたばかりの蒸し暑い教室。外から聞こえるせみの鳴き声により、その暑さが一段と増している。夏休みが始まったばかりの教室で机を向かい合わせにして座っているのは、タケシと母、担任教師の三人。「タケシ、本当に高校に進学しなくていいのか。」

高校に進学したくないわけではない。しかし、これから働いてお金を稼がなければ、弟二人を高校に行かせることができないばかりか、明日の生活も苦しい。申し訳なさそうにうつむく母の前に、タケシは決断を迫られた。

「ぼくは、大好きな絵を描きながら働いて、少しでも母の助けになれるようにがんばります。」

タケシは、昭和十七年に生まれた。当時の日本は敗戦の波にのまれて生活が苦しかった。アメリカ兵が近所を通るたびに、幼い子どもたちはキャンディーやチョコレートをもらおうと、みんなで群がり空腹を満たしていたような時代だった。そんな社会情勢の中、結核がはやり、タケシの父も若くして亡くなったのだ。

一人上京したタケシは、広告会社に就職した。高度経済成長期の日本では、会社員の多くが朝から晩まで働き詰めであった。ある日の仕事帰り、疲れ果てて乗車した満員電車の中で、スケッチブックを持った女子学生二人が座っていた。学生は、学校生活についておしゃべりをしたり、スケッチブックの作品を見せ合いながらきやつきやつと楽しそうに話したりしている。芸術専門学校で美術を学んでいる学生と思われる。乗客と乗客のちよつとした隙間から見えるスケッチブックの絵は、タケシの心を魅了した。残雪の山々を背景にどこまでも続く田園風景……。





いつかタケシが描いてみたかった風景だった。専門学校の課外授業で、教師と学生が一緒に東北地方へ出向いて仕上げた作品であるらしい。(専門学校に進学していれば、自分も、毎日、好きなことを勉強できたのに・・・)そんなことを思っただけでいいけど、今まで、心のどこかで感情を押し殺していたのかもしれない。自分の境遇をうらむのではなく、後悔でもなく、なんとも表現しがたい気持ちもやもやと残るのであった。

タケシは、職を転々とし、ふるさとである宮城に戻って、看板を製作したり取り付けたりする仕事に就いた。ある日、新しく開店する中華料理店の看板を取り付けているときのことだった。「おつ、タケシじゃねえか。」

振り向くと、そこには中学校の同級生であるマサヒコが立っていた。

戦争で両親を失ったマサヒコは、タケシと同じく高校へは行けず、独学で調理師の免許をとり、父親が営んでいた中華料理店を継いだということだ。高校に行けなかった悔しさや修行中に負った首もとの火傷が原因で、一時は自暴自棄になったという話を聞いた。それでもマサヒコは、古ぼけた中華料理店の前で両親と一緒に写っているたった一枚の写真を見ては、自分を奮い立たせたという。

マサヒコとの再会は、タケシの心に火を灯した。「自分の絵を描き続けたい」という心の奥底にしまっていた夢が、ふつふつと沸き上がってきた。ついに、自分の会社を設立することを決意し、イラストレーターとして再出発した。忙しい時期には、寝る間も惜しんで仕事に没頭した。今までの会社で社会人としての基本的なことは学んできたが、専門学校にも行っていないため専門的な知識はすべて独学だった。

年老いた母はときどき、

「タケシを高校に行かせられなかったのだけは、悔やまれるなあ。」

とつぶやく。しかしタケシは、

（過去の自分があるから、今の自分がある。高校や専門学校に進学していたら、今のようになっていたかは分からない。自分が置かれた環境や立場で、どう生きていくかは、結局、自分で切り開くしかない。）

と振り返る。

九九歳で母は亡くなった。仏壇に飾られているのは、個展の案内のはがき。はがきに描かれている絵は、かつて東京の電車の中で、学生が持っていた、スケッチブックに描かれていたような、懐かしく優しい田園風景だった。

